

シンガポールの言語状況と言語教育について
-現地調査から-

<はじめに>

シンガポール英語の特徴

(例文)

- Eh, don't ask me how to do this question lah!
- Alamak! I'm late.
- Eh, still studying ah? Very late leh. Go and makan together lah.
- The roti prata in that coffee shop very nice. Teh tarik also good.
- You wanna go Singapore Swing, is it? Say so lah.

Source: Pakir (1992)

* TUFS×KANDA 英語モジュール・シンガポール英語版開発中

1. シンガポールの概要

位置：東南アジアのほぼ中心、赤道直下

気候：高温多湿、年を通して平均最高気温が 31 度前後、平均最低気温が 23-24 度

正式な国名：

Republic of Singapore (英語)

新加坡共和国 (華語)

Republik Singapura (マレー語)

சிங்கப்பூர் குடியரசு (タミル語)

建国：1965 年

人口：540 万人 (2013 年 6 月)

経済：

- ・GDP は 2,957 億ドル (約 30 兆円)、一人当たりの GDP は世界でも上位 (IMF2013 年)
- ・国際金融センターランキング：世界第 5 位
- ・富裕層の割合が世界一高い (6 世帯に 1 世帯が金融資産 100 万ドル以上保有)
- ・物価が世界一高い (2014 年英誌「エコノミスト」調査)

軍事：陸軍約 50,000、海軍 9,000、空軍 13,500 の計 72,500 名。男子は 2 年間の兵役義務付け。

統制された国家：

(例 1) ゴミのポイ捨てに罰金

—初犯\$300SGD、2 回目以降\$500SGD および corrective work order(CWO)も科せられる場合もあり。

(例 2) 公共交通機関(MRT)での飲食禁止。

—\$500SGD

(例 3) 調和のとれた多民族共存を目指す公共政策

—高層住宅団地(Housing and Development Board (HDB))=80%以上の国民が居住
=一つの民族集団を 1 か所に集中させない政策

2. シンガポールの民族・言語状況、言語政策

・民族構成：華人 (中華系) 76.7%、マレー系 14%、インド系 7.9%、その他 1.4%

・公用語：英語 (第一言語)、華語、マレー語 (国語)、タミル語

国民にとって英語が「第一言語」、民族語 (母語) が「第二言語」

(母語 mother tongue は「父親が話す言語」)

シンガポールにおける英語の位置づけ (Lin & Brown(2005))

- ①公用語 ②学校教育の言語(1987 年より)—英語は国民の「第一言語」
- ③公的部門及び民間部門の「業務言語 working language」
- ④社会の共通語 ⑤異民族が共通の国家的アイデンティティを表現する言語

⑥国際語

・“スピーク・マンダリン” キャンペーン

1979年開始、異なる中国語変種を話す中華系の共通語としてマンダリン（華語）を推進。
 （福建語 49.0%、広東語 27.7%、潮州語 19.4%、その他 6.7%）

マンダリンは、中華系住民にとって中立的。中華系共通語の役割を果たす。

小中学校における中華系の「母語」教育として「華語」を学習させる。

→中華系の反発—英語以外に「華語」も学ばなければならない。しかし、結果として、徐々に、華語が家庭内使用言語(home language)として定着。

家庭内使用言語（2010年国勢調査結果）

英語	華語	他の中国語変種 (福建語、潮州語、広東語)	マレー語	インド諸語 (タミル語など)	その他
32.3%	35.6%	14.3%	12.2%	4.4%	1.1%

Source: Census of population 2010, Statistics Singapore

※家庭内で、華語、英語を話すシンガポール人が増加（子供世代を中心に）

=英語への言語シフト 11.6%（1980年）→20.3%（1990年）→32.3%（2010年）

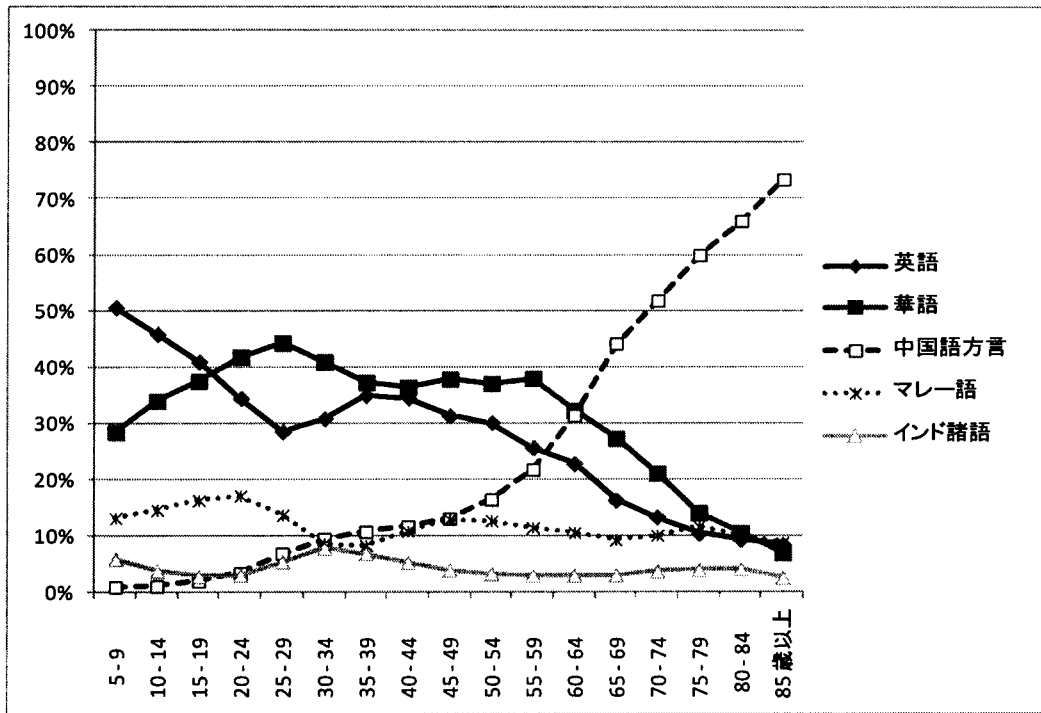


図1. 年齢層別に見る家庭内使用言語

Source: Census of population 2010, Statistics Singapore, table 47 より作成

世帯収入・学歴が高い家庭ほど、英語が家庭内使用言語となる傾向



・複雑なダイグロシア/ポリグロシア社会

Platt (1977) Polyglossia with Multilingualism

高位変種(H)=英語、下位変種(L)=中国語、マレー語、インド諸語

英語・・・H=Standard Singapore English, L=Colloquial Singapore English (Singlish)

中国語・・・H=華語、L=その他の中国語変種（福建語、潮州語、広東語など）

H (フォーマルなドメイン)	小中学校で学ぶ母語	L (インフォーマルなドメイン)
標準シンガポール英語 (共通語)	華語 (中華系の共通語) マレー語、タミル語	口語体シンガポール英語 (共通語) 福建語、潮州語、広東語、

(例) 福建語を母語とする高学歴シンガポール人の言語使用

家族—福建語 (→華語あるいは英語にシフト)

同族の友人—福建語、口語体シンガポール英語、両方のコードスイッチング

異民族の友人—シンガポール口語体英語

小中学校の母語教育—華語

大学の教育、多国籍企業の社員が職場で—標準シンガポール英語

※低学歴のシンガポール人の英語は口語体シンガポール英語のみ。

• “Speak Good English” movement (SGEM) (2000 年-) : Singlish の排除が目的

教育省主導—学校教育で標準的な英文法や語彙を教えるキャンペーン (教員をまず教育)

-毎年、異なるテーマで全国的にキャンペーン: ワークショップ、セミナー、弁論大会など。
主なターゲットとなる国民が毎年代わる。

-2005 年のキャンペーンより、Singlish の排除よりも、Singlish を話すのは「適切な場面」で良いが、世界に通用する標準的な英語も話せるようになろう、との姿勢に変化。

↓

対抗勢力

TalkingCock “Save our Singlish Campaign”ウェブサイトの開設、Singlish のオンライン事典
Speak Good Singlish Movement 2010-

3. シンガポールの教育制度

☆別紙参照

- ・小学校から英語が教育言語(1987 年より)
- ・英語と母語 (華語、マレー語、タミル語) のバイリンガリズム—母語は科目として学ぶ。

English-knowing bilingual (Pakir 1991)

- ・義務教育では能力別教育

小1—小4 : Foundation stage

小5・6 : Orientation stage = 能力別クラス編成—EM1(10-15%), EM2(70-75%), EM3(10-15%)

小学校修了時: 小学校卒業試験(PSLE)を受験

中学校: Express course 4 年間→GCE O レベル試験(→Junior College→A レベル→大学へ)

Normal Academic 4 年間→GCE N(A)レベル試験 (→ポリテクニクなどへ)

Normal Technical 4 年間→GCE N(T)レベル試験 (→技術教育学院などへ)

- ・シンガポール人の学歴の内訳
27.3%が大卒 (2013 年)

4. 現地調査①—シンガポール国立大学 National University of Singapore (NUS)

- ・設立年: 1905 年

- ・学部・大学院

人文社会科学部、経営学部、コンピューター学部、歯学部、設計・環境学部、工学部、工学部、
法学部、Yong Loo Lin 医学部、Saw Swee Hock 公衆衛生学部、Yong Siew Toh Conservatory of Music、
理学部、Lee Kuan Yew 公共政策学部、総合理工学大学院、Duke-NUS 医学大学院

- ・学生数 (2013-14 年度): 37,452 名

(学部生 27,391 名、大学院生 10,061 名)

- ・人文社会科学部 Faculty of Arts and Social Sciences (FASS)

-アジア研究: 中国語、中国研究、日本研究、マレー研究、南アジア研究、東南アジア研究

-人文科学系: 英語、英文学、歴史学、哲学、シアター研究

- 社会科学系：コミュニケーション&ニュー・メディア、経済学、地理学、政治学、心理学、ソーシャル・ワーク、社会学
- 言語プログラム：12言語 *Centre for Language Studies が直接運営
- 学際的プログラム：ヨーロッパ研究、グローバル研究、アメリカ研究、副専攻としての宗教研究や都市問題研究、など17の分野

Centre for Language Studies (CLS)

- 2001年に設立
- 12言語の教育を担当：
 - アラビア語、バハサ・インドネシア語、中国語、フランス語、ドイツ語、ヒンディー語、日本語、韓国語、マレー語、タミル語、タイ語、ベトナム語
- 一学期に約2,600名が登録
- 2月27日会合<CLSにおける言語教育とCEFR導入状況について>
 - Dr. Wai Meng Chan, CLS 所長
 - Ms. I. Wulansari 講師 (インドネシア語プログラム)
 - Dr. I. Walker, CLS 副所長、主任講師 (日本語プログラム)
 - Ms. S. Klayklung, 主任講師 (タイ語プログラム)
 - Ms. C. Chu Shan-Hui, 教員 (中国語プログラム)
 - シンガポールの教育制度についての説明。
 - CLS 全体としてはCEFRを導入していない。ヨーロッパ出身の教員はCEFRに準拠した教材を採用することがある。
 - 受講者の多い語学プログラム (2014年度1学期)
 - ①日本語、②ドイツ語、③フランス語、④韓国語 (増加)
 - CLSの受講者はLanguage Studies (言語プログラム)の学生よりも、ビジネス、工学部、ヨーロッパ研究などの学際的プログラムの学生の方が多い。(日本語と中国語のプログラムにはビジネスを目的としたコースあり。)
 - シンガポール人は外国語を学ぶ素質が高い。幼いころから多言語に接しているため。
 - NUSでは留学を奨励
 - 約40カ国における約300の海外の大学と交換留学制度(Student Exchange Programme)を確立。
 - 学部生の約30%が交換留学生として留学。その他は、短期留学、語学研修。約70%が海外経験。

• 2月28日会合<CLS フランス語プログラムにおけるCEFR導入状況について>

Ms. B. Malwina 講師 (ポーランド人)

- 正式には、受講者の到達を測るのにCEFRのディスクリプターは利用していない。しかし、フランスに受講者が留学する際は、CEFRの自分のレベルを認識させる。
- CEFRに準拠したフランスのテキストを採用。

-CLS フランス語プログラムのコースとCEFRのレベル

French 1-2 : A1-A2 = 120名が受講 (30名×4クラス)

会話のクラスは少人数制13名ずつ×9クラス

French 3-4 : A2+-B1

French 5-6 : B2-C1 = 16-25名が受講。

European Studies, Engineering, Business Studies の学生が多い。

5. 現地調査②—南洋工科大学 Nanyang Technical University

- 1991年に設立
- 学部・大学院

College of Business, College of Engineering, College of Humanities, Arts and Social Sciences

College of Science、School of Medicine、Interdisciplinary Graduate School

・学生数 (2013-14 年度) : 33,500 名

・ National Institute of Education (NIE)

学生数 (2013 年 3 月現在) 4,891 名

12 学科(Academic Groups)

Asian Languages and Cultures

Curriculum, Teaching and Learning

Early Childhood and Special Needs Education

English Language and Literature

Humanities and Social Studies Education

Learning Sciences and Technologies

Mathematics and Mathematics Education

Natural Sciences and Science Education

Physical Education and Sports Science

Policy and Leadership Studies

Psychological Studies

Visual and Performing Arts

・ 3 月 3 日会合<NIE における教員養成言語教育について>

Dr. Goh Yeng Seng: Head, Asian Languages and Cultures Academic Group, NIE

華語、マレー語、タミル語の教員を養成

義務教育における母語教育：

教育言語：母語→母語＋英語へ =Bilingual Approach

—華語を小中学校で教える中華系の教員志望の学生—「家庭内使用言語が英語」が増加
→“Using a Bilingual Approach to Train Chinese Language Teachers-A Singapore Model” (Goh 2011)

<特徴>

1. 主な教育言語を華語とし、英語を補助的教育言語とする。徐々に英語を少なくする。
2. 華語と英語との違いを理解させる(metalinguistic awareness)

・ 3 月 3 日会合<Singapore Centre for Chinese Language>

2009 年に設立。

<使命>

- バイリンガルな環境において第 2 言語としての華語を教える教員の教育能力を育成。
- シンガポールにおける中華文化と華語の発展を推進。

まとめ

- ・今回調査では、CEFR を正式に導入している教育機関はなかった。
- ・NUS の Centre for Language Studies のヨーロッパ出身の教員は CEFR を意識した教育を行っている。
- ・シンガポールの若年層に、英語への言語シフトが見られる。
→義務教育における母語 (第二言語) 教育の方法を改変している。
- ・シンガポール英語(Singlish)の実態をかなり把握できた。

参考文献

- ・ Ban, K.C., Anne Pakir, & Y.C. Tong (1992) *Imagining Singapore*, Times Academic Press.
- ・ Goh, Yeng Seng (2011) “Using a Bilingual Approach to Train Chinese” 孔子学院.
- ・ Lim, Lisa, Anne Pakir & Lionel Wee (2010) *English in Singapore: Modernity and Management*, University of Hong Kong Press.
- ・ Ling, Low Ee & Adam Brown (2005) *English in Singapore: An Introduction*, McGrawhill.
- ・ Singapore Centre for Chinese Language (2014) “Training Courses for Secondary CL Teachers”